

第1章

2030年を見据えた教育

～ 目 次 ～

1	新しい時代に求められるもの	10
2	0歳から18歳までを貫く「資質・能力」	
	(1) 0歳から18歳までつながる保育・教育	11
	(2) 就学前の保育・教育で育成を目指す「資質・能力」	12
	(3) 小学校教育で育成を目指す「資質・能力」	13
	(4) 資質・能力の育成を目指す「主体的・対話的で深い学び」	14
3	佐賀市の接続期教育と接続期プログラム「えがおわくわく」	
	(1) 佐賀市の接続期教育で育てたい子ども像	15
	(2) 接続期プログラム「えがおわくわく」	16

1 新しい時代に求められるもの

「Society5.0」時代の到来。今、私たちはかつてない大きな社会の変革期にあります。

「Society5.0」とは、人工知能（AI）、ビッグデータ、Internet of Things（IoT）、ロボティクス等の先端技術が高度化し、あらゆる産業や社会生活に取り入れられた社会のことです。

次世代の子どもたちが、このAIを中核とした革新的な変化が起こるであろうこれからの未来を、豊かに生き抜いていく力を身に付けることができるように、必要な環境を整えていくことは、私たち大人の責務であり、とても重要なことです。

「Society5.0」

⇒AI 技術の飛躍的な発達
⇒定型的業務等は、AI により代替
⇒産業の変化、働き方の変化

◇経済や文化など、国境を超えて活性化
⇒多様な人々とのつながりの緊密化
◇情報が、広範囲かつ複雑に伝播
⇒加速度的な変化と予測困難な社会

人間の強み

場面や状況を理解して自ら目的を設定し、目的に応じて必要な情報を見いだす。
⇒「自分の考えをまとめる」、「相手にふさわしい表現を工夫する」、「多様な他者と協働する」⇒目的に応じた納得解を見いだすことができること。

このような現状の中、2030年とその先の社会の在り方を見据えたとき、保育・教育を通じて育てたい子どもたちの姿は、次のように描くことができます。

育てたい子どもの姿（18歳の姿）

社会的・職業的に自立した人間として、我が国や郷土が育んできた伝統や文化に立脚した広い視野を持ち、理想を実現しようとする高い志や意欲をもって、主体的に学びに向かい、必要な情報を判断し、自ら知識を深めて個性や能力を伸ばし、人生を切り拓いていくことができる。

対話や議論を通じて、自分の考えを根拠とともに伝えるとき、他者の考えを理解し、自分の考えを広げ深めたり、集団としての考えを発展させたり、他者への思いやりをもって多様な人々と協働したりしていくことができる。

変化の激しい社会の中でも、感性を豊かに働かせながら、よりよい人生や社会の在り方を考え、試行錯誤しながら問題を発見・解決し、新たな価値を創造していくとともに、新たな問題の発見・解決につなげていくことができる。

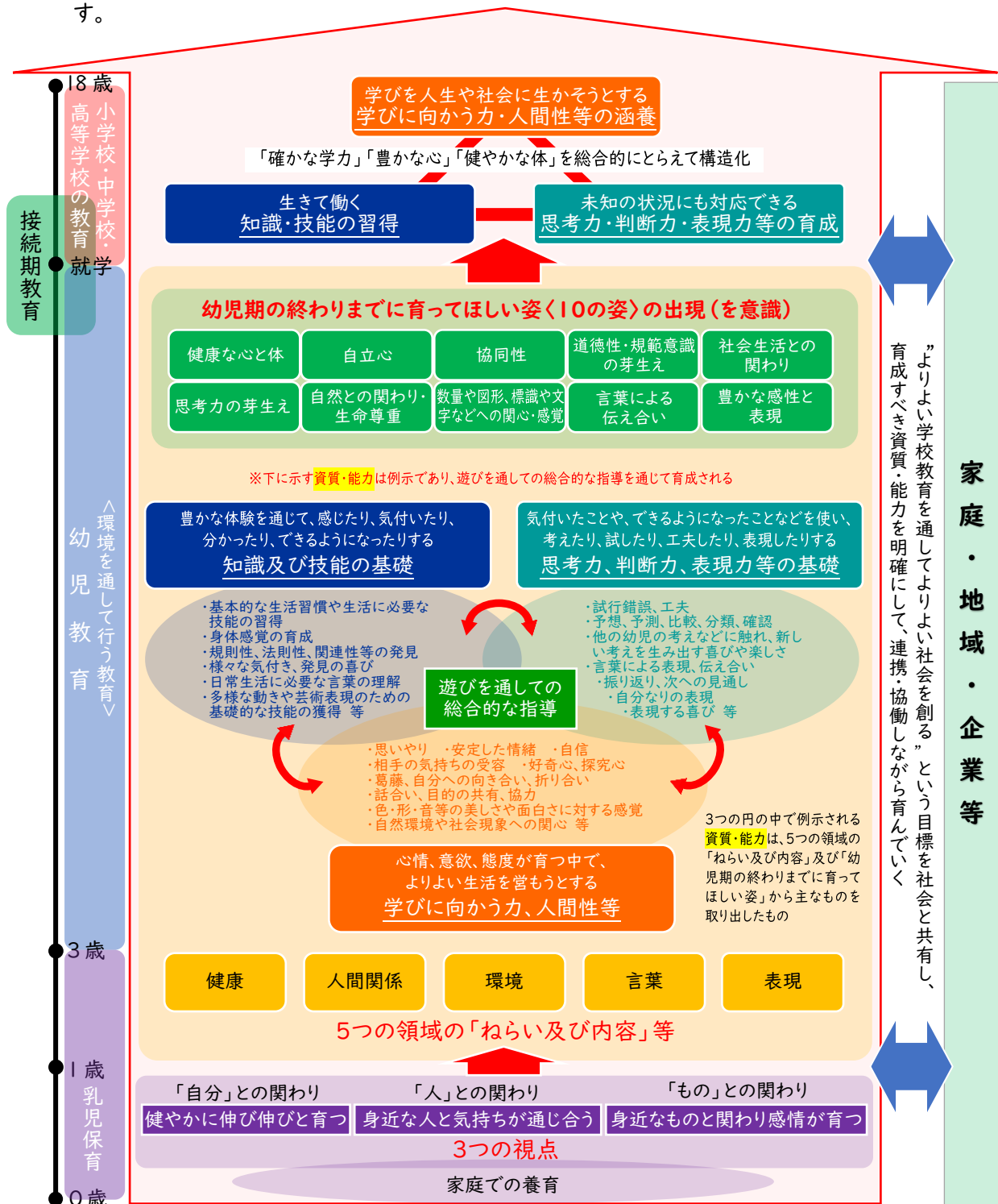
そこで、**資質・能力の育成** が求められている。

- ① 「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）」
- ② 「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）」
- ③ 「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）」

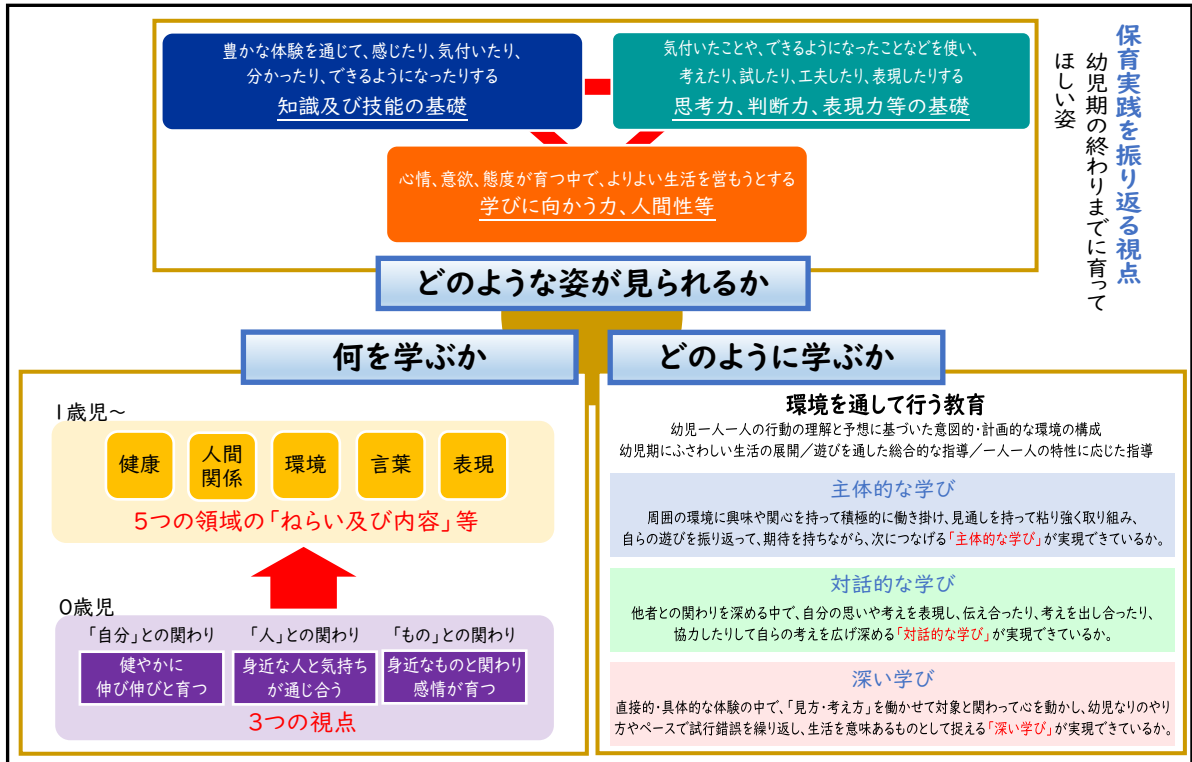
2 0歳から18歳までを貫く「資質・能力」

(1) 0歳から18歳までつながる保育・教育

幼稚園教育要領、小学校・中学校・高等学校の学習指導要領では、「一人一人の子どもが、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるように培っていくことが求められる」とされ、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領でも同様のことが示されています。これを実現していくためには、幼児期の教育の基礎の上に小学校以降の教育がつながることを見通しながら、子ども一人一人の資質・能力が育まれ、伸ばせるように保育・教育していくことが重要です。



(2) 就学前の保育・教育で育成を目指す「資質・能力」



©2020 Sakata Kazuko・佐賀市

ポイント①： 学びの基盤は0歳児から（3つの視点と5領域）

- ◆ 3〜5歳児だけでなく、1〜2歳児にも5領域、0歳児には3つの視点が定められた
- ◆ 0歳児から視点や領域に基づく育ちの積み重ね
- ◆ 安心感を基礎として、発達に応じた様々な体験を通して学びの芽が育まれていく

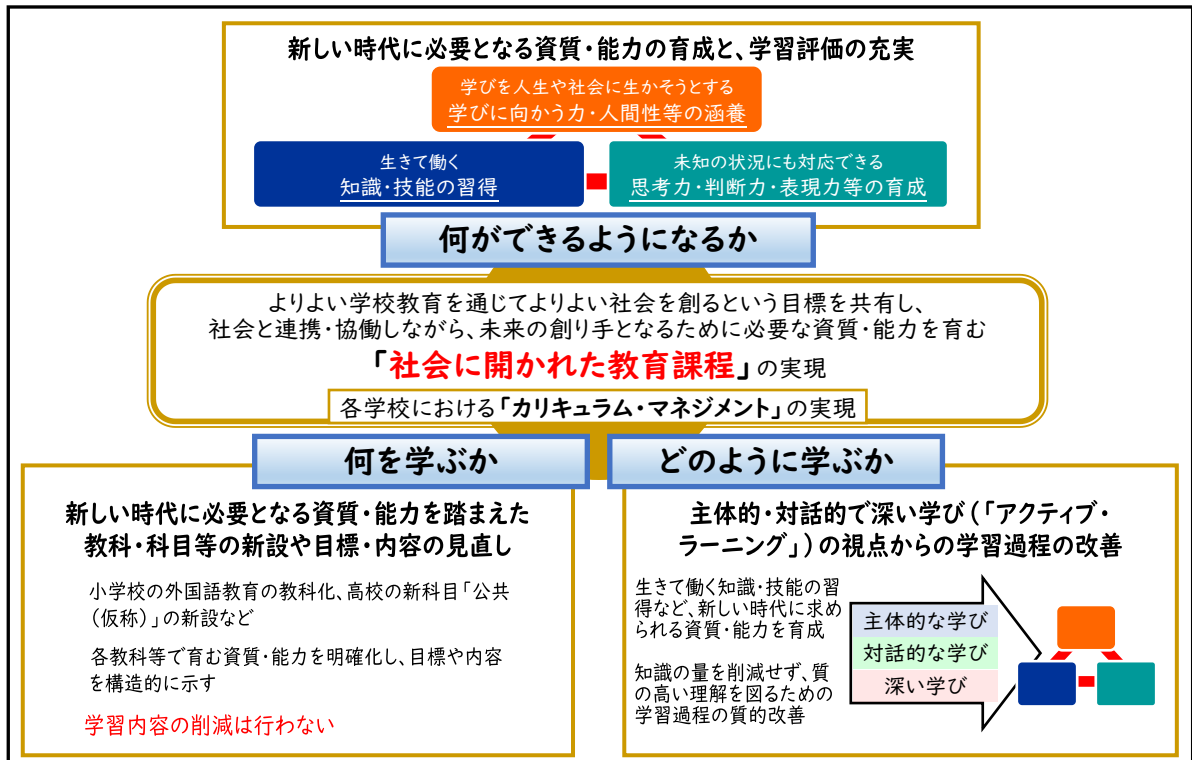
ポイント②： 環境を通して行う教育と非認知能力

- ◆ 幼児教育では、子どもが保育者（本誌では保育士・保育教諭・幼稚園教諭のことをまとめて「保育者」と記載する。）や身近な人、時間や空間・教材、行事等の「ひと・もの・こと」に主体的に関わり、夢中になって遊び楽しむ中で、学びの芽が育まれる「環境を通して行う教育」が重要
- ◆ 幼児期に育てたい非認知能力は、「最後までやり抜こうとする力」「気持ちをコントロールする力」「コミュニケーションする力」であり、安心感・自己肯定感を基礎として育まれていく

ポイント③： 一人一人のよさや可能性を大切にすまなざし

- ◆ なぜそのような姿なのか、何に興味があるのか、どんな気持ちなのかを見取り理解することで、その子に必要な援助は変わる
- ◆ できる・できないではなく、「子ども自身が育とうとしていること」に目を向け、一人一人のよさを認め伸ばしていくことが重要

(3) 小学校教育で育成を目指す「資質・能力」



文部科学省:新しい学習指導要領の考え方「学習指導要領改訂の方向性」を参考に作成

ポイント①：社会に開かれた教育課程の実現

- ◆ 「社会に開かれた教育課程」は、資質・能力や学ぶべき内容を見渡せる「学びの地図」
- ◆ 学校教育だけでなく、「家庭、地域、企業等」を含めた関係者の創意工夫により、多様で質の高い学びを引き出すことができる

ポイント②：カリキュラム・マネジメントの推進

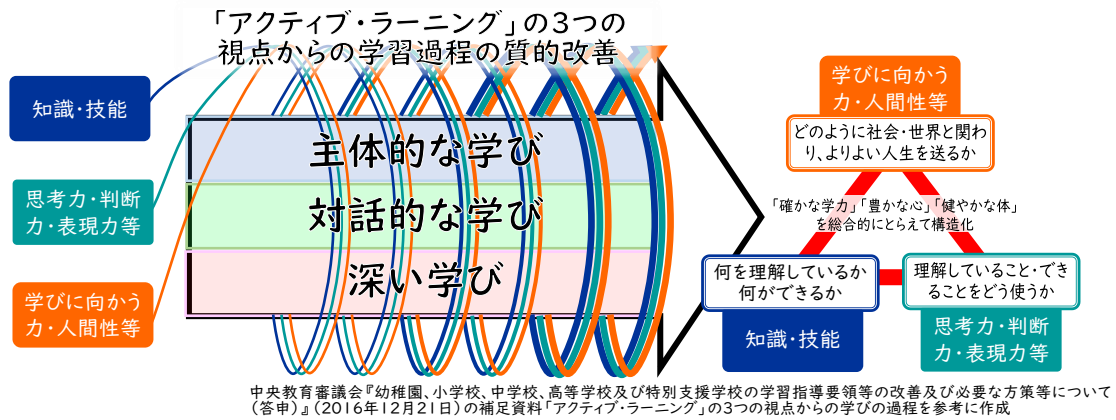
- ◆ 「教科横断的な視点」での再構成
 → 入学当初は生活科を中心に、合科的・関連的な指導と弾力的な時間割の設定が重要
- ◆ 「PDCAサイクル」の確立
- ◆ 「教育内容と人的・物的資源」の効果的な組み合わせ

ポイント③：一人一人のよさや可能性を大切にすまなざし

- ◆ 「学びに向かう力・人間性等」の涵養
 → 「①主体的に学習に取り組む態度」と「②感性、思いやりなど」で評価
- ◆ 「②感性、思いやりなど」は、個人内評価
 → 一人一人のよい点や可能性、進歩の状況などを積極的に評価し、日々の教育活動の中で、子供に伝えることが極めて重要

(4) 資質・能力の育成を目指す「主体的・対話的で深い学び」

資質・能力を育むためには、「主体的な学び」・「対話的な学び」・「深い学び」の3つの視点を取り入れて学びを作り、指導の改善を図ることが不可欠です。



【主体的な学び】

【幼児教育】

周囲の環境に興味や関心を持って積極的に働き掛け、見通しを持って粘り強く取り組み、自らの遊びを振り返って、期待を持ちながら、次につなげる「**主体的な学び**」が実現できているか。

【小学校教育】

学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「**主体的な学び**」が実現できているか。

【対話的な学び】

【幼児教育】

他者との関わりを深める中で、自分の思いや考えを表現し、伝え合ったり、考えを出し合ったり、協力したりして自らの考えを広げ深める「**対話的な学び**」が実現できているか。

【小学校教育】

子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「**対話的な学び**」が実現できているか。

【深い学び】

【幼児教育】

直接的・具体的な体験の中で、「見方・考え方」を働かせて対象と関わって心を動かし、幼児なりのやり方やペースで試行錯誤を繰り返し、生活を意味あるものとして捉える「**深い学び**」が実現できているか。

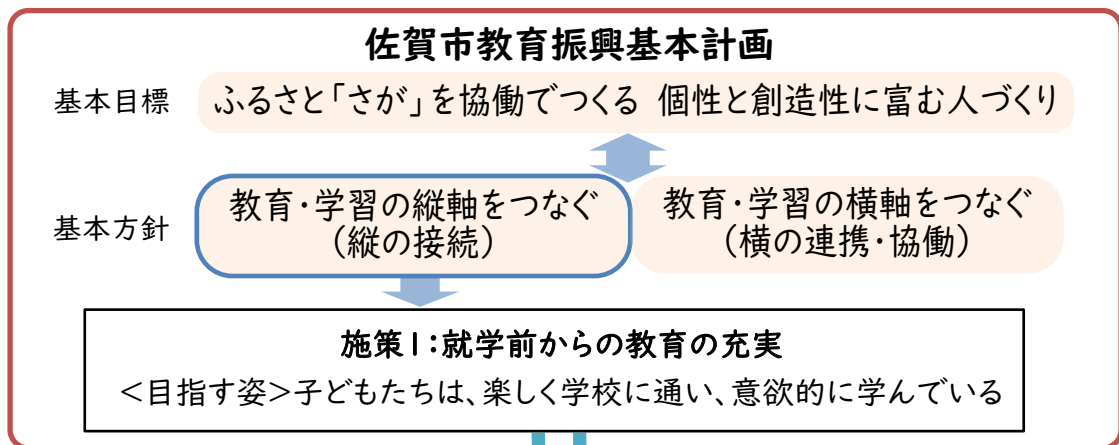
【小学校教育】

習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「**深い学び**」が実現できているか。

3 佐賀市の接続期教育と接続期プログラム「えがおわくわく」

(1) 佐賀市の接続期教育で育てたい子ども像

『**安心感をもち、
意欲的に学んでいる子ども**』



＜接続期教育で育てたい子ども像＞
『**安心感をもち、意欲的に学んでいる子ども**』

どこの小学校に就学しても、自分らしく
学校生活を楽しめる子
ありのままの姿を受け止められ、認め
られることで「えがお」になる

新しい学習に関心をもち、学ぶことを喜び、
楽しめる子
「やってみたい」「どうなるかな」「おもしろい」
「もっと」という「わくわく」の気持ち



楽しく学校に通う子どもの育ちの
すべては「安心感」から

園とは違う生活の流れ・・・
授業の始まりのチャイムが鳴りました。
涙が止まらない子どもがいます。
「思いをしっかり受け止めてもらっている子ども」
「大丈夫かな?と心配している子ども」
「そんなに気にしていない子ども」
でも「先生、早くして!」という言葉はありません。
ある佐賀市立小学校のこの教室は
「安心感」という温かい空気に包まれていました。

(2) 接続期プログラム「えがおわくわく」

接続期プログラム「えがおわくわく」は、乳児保育・幼児教育と小学校教育の接続期に関わる保育者と教師が互いの教育の特性を理解し、よりよい連携・接続を考えるために参考としてほしい接続期の教育プログラムです。



接続期プログラム「えがおわくわく」の対象期間

子どもは就学を機に、遊び主体の生活から授業主体の生活へ大きく変化します。その大きな変化の中、接続期の子どもに関わる保育者及び教師は、子ども一人一人の気持ちに寄り添い、心の安定・安心を図りながら、子どもの育ちの一貫性を保障していかなければなりません。そのためには、互いの教育について理解を深め、子どもの姿と育ちや学びの連続性を共有して、子どものよさや可能性を丁寧に見取り、伸ばしていくことが必要です。

そこで、えがおわくわく第8版では、この接続期を「**えがおわくわく期**」という一つの期間に設定し、対象期間を「**5歳児の10月から小1の7月まで**」に設定しています。

なお、本プログラムを運用する上では、就学前後で区分する必要がありますので、年長児の期間と小学校1年生の期間をそれぞれ「**年長アプローチカリキュラム期**」、「**小1スタートカリキュラム期**」と定めています。

